

## 一九〇五年バクーの労働運動と民族衝突

伊藤 順 二

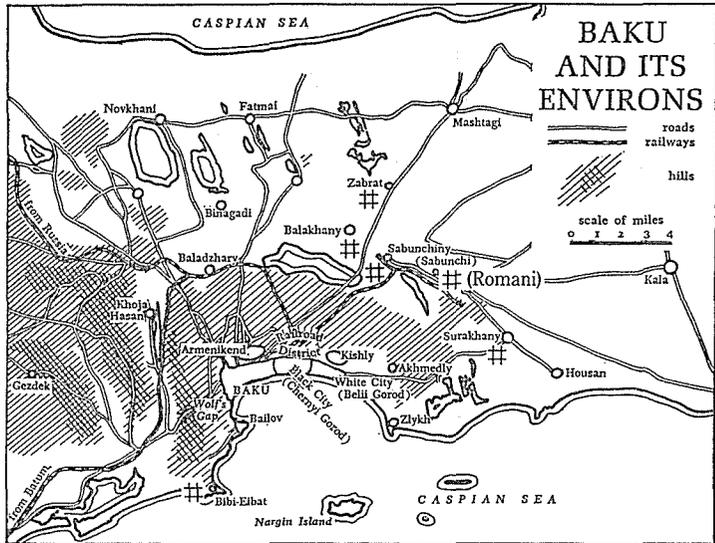
【要約】一九〇五年にバクーで起きたムスリムとアルメニア人の二度の民族衝突は、ロシア政府の煽動による面のみが強調されがちである。確かに、二月の衝突はロシア政府、および政府と結託したムスリム「ゴチユ」層の主導で始まった。しかし八月衝突にはムスリム労働者も参加している。五月から八月にかけて、ムスリム／不熟練労働者は、労働運動を展開する中で、一二月協約の成果を得ていたキリスト教徒／熟練工との溝を深めていった。民族と労働階層の重なりに加え、社民系二党派の対立もこの亀裂を広げている。八月衝突の直前には、熟練工／アルメニア人組織の妨害によって、不熟練労働者中心のゼネストが失敗している。ムスリム労働者の労働運動に対する不満は、モッラー等の宣伝によってアルメニア人に向けられる。八月衝突は、労働者階層対立の具現という側面も持っていたのである。

史林 八〇巻三号 一九九七年五月

### はじめに

多民族都市バクーは、帝政ロシア領アゼルバイジャンの中心であり、二〇世紀初頭においては世界最大の石油都市でもあった。労働運動も盛んで、一九〇三年七月には「南ロシアゼネスト」の口火を切り、一九〇四年一二月にはロシア労働史上画期的な団体協約を締結するなど、一九〇五年革命に先駆けて活動を活発化させている。

しかし、一九〇五年のバクーとザカフカスを彩ったのは、むしろムスリムとアルメニア人との流血の対立であった。二月にバクーで起った「アルメニア人虐殺」は、ザカフカスにおける両民族の武装衝突として史上初めてのものであり、これを契機として両民族の武装対立状況がザカフカスのほぼ全土に成立する。この対立の構図は内戦期を経て現在にまで受



井 = 主要な油田

け継がれている。

旧ソ連の研究は、ラエフスキの古典的著作以来、両民族の衝突を「反動勢力の反革命的陰謀」として片づけている。

帝政ロシアは一八九〇年代から同化政策を強化し、民族主義的活動の盛んなアルメニア人を圧迫する「反アルメニア親タタール」政策を展開していた。一九〇五年革命期には、政府は親体制的ムスリムを煽動し、アルメニア人の活動、ひいては革命運動全般に打撃を与える事を企てた、③ ④ ⑤ ⑥

確かにバクーの二月衝突は明らかに政府の煽動を主要原因とした。それ故、バクーの二度の民族衝突は、ユダヤ人ボグロムと同じく、ツァーリ権力による反政府運動の分断の試みとして捉えられている。背景として劣位のムスリム・ブルジョワと優位にあるアルメニア人・ブルジョワとの対立は示唆されるが、労働者の関与について言及はない。⑤ また八月衝突は、二月衝突の単なる反復として、あまり注目されていない。

労働運動史としては、欧米ではスーニー、日本では高橋清治氏の著作があり、後に見るように、民族と労働階層との相関が統計的に明らかにされているが、両氏とも民族衝突については詳述していない。⑥

欧米では国民形成史上の研究として、アルツタットとスヴェトコウスキの著作が出されている。⑦ それらによれば、アゼ

ルバイジャンのムスリムが、宗教的帰属意識とは別の、より地域的に限定された「アゼルバイジャン人（＝ムスリム）」意識を成立させるのは世紀転換期以降の事であるという。一九〇五年もムスリム近代主義者の活動の開花期として重視されている。

しかしその上での民族衝突の位置付けは消極的である。とりあえず、両者ともアゼルバイジャンの民族衝突を、国民形成の大衆的契機の一つとして捉えてはいる。アルツタットはこの事件が「民族的・宗教的アイデンティティの強化」につながったとし、スヴェトコウスキも「アゼルバイジャンのムスリム・コミュニティの確立の触媒」になったと規定している<sup>⑧</sup>。共通の記憶、共通の神話の創出は確かに国民形成の基礎であろうし、事実、この時点に創られた武装対立の構図は、現代にまで翳を落している。

だが、特にアルツタットが強調するように、ムスリム近代主義者自身は民族衝突には反対している<sup>⑨</sup>。一九〇五年以降も、民族衝突の記憶は国民形成のレトリックとして使われず、むしろ異民族との善隣友好が強調されているのである。近代的なネイション形成の観点からは、民族衝突の意義はむしろ否定的もしくは間接的に捉えられている。

そのためか、衝突の原因も深く追求されていない。スヴェトコウスキは民族衝突の原因については、政府煽動論に加え、長期的原因を重視する同時代のジャーナリストの見解を再掲するに留まっている<sup>⑩</sup>。アルツタットも「数十年間のロシア統治政策」または「深い歴史的・社会的・経済的基盤」に闘争の根源を見るべきと示唆するが、具体的分析は政府煽動論の確認に留まる<sup>⑪</sup>。

長期的な原因も勿論無視はできない。しかし、武装衝突に至る対立状況は一九〇五年に初めて引き起こされたものである。単なる「政府の陰謀」が原因だったとしても、民族衝突が大規模な民衆運動として起こっている事を考えれば、事件そのものの性格の再検討は必要だろう。

民族衝突の主体、特に一般に「虐殺者」とされるムスリムの民族衝突参加層の実体について、従来の研究は明らかにし

ていない。興味深いことに、ムスリム労働者像は、諸活動家の回想録でも、「労働運動の最も戦闘的な担い手」と「反動の走狗」「民族衝突参加者」「労働運動反対者」という両極の間に揺れを見させている。アルツタットもムスリムの「労働運動からの疎外」を示唆している<sup>⑩</sup>。労働運動史上も、ムスリムの位置付けは不明確なのである。

労働運動史・国民形成史双方において、民族衝突は従来「反動的」趨勢の一つと見なされ、充分な分析を受けなかった。しかし事件史的看着で、民族衝突は労働運動と密接に連動して発生している。本稿では、一九〇五年の民族衝突を、労働運動の事件史の流れの中から見直し、その煽動主体と参加主体について考察することによって、バクーにおける「民族と階級との錯綜した構図」(スローニー)を繕いてみたい<sup>⑪</sup>。

① 本稿では口述は露暦、即ちユリウス暦を使用する。本稿の範囲では表示された日付に二三日を加えればグレゴリウス暦になる。

② アゼルバイジャンのナレク系住民は、当時の呼称では「民族的実状を無視して」、一般に「タタル」と呼ばれた(実際にはタタル民族とは無縁)。本稿が扱う時期については「アゼルバイジャン人」としての民族意識は、一般に希薄である。当時であった「現地ムスリム」との呼称が最も中性的だが、労働者の多くはイラン国籍の移民なので、本稿ではとりあえず、ロシア人・アルメニア人・ギリキスト教徒との対立のみを考慮して彼らを「ムスリム」と呼ぶことにする。

③ Раевский, А., *Большевики и меньшевики в Баку в 1904-1905 гг.*, Баку, 1930. 44-47; Гусейнов, И. А. и др. (ср.), *История Азербайджана в трех томах*, Баку, 1960; *Азербайджан в годы первой русской революции*, Баку, 1966; Араимов, М. *Из истории борьбы за националистско-левинское учение в Азербайджане (1905-1907 гг.)*, Баку, 1971. \*参照。

④ 南ロシアのユダヤ人エッセイリストのコンビで、Klier, J. D. & Lambroza, Shlomo (eds.), *Pogroms: Anti-Jewish Violence in Modern Russian*

*History*, Cambridge U. P., 1992; Lambroza, Shlomo, *The Pogrom Movement in Tsarist Russia, 1903-1906*, Ph. D. disser. Rutgers Univ., 1981; Weinberg, Robert, *The Revolution of 1905 in Odessa: blood on the steps*, Indiana U. P., 1993, pp. 164-187. \*参照。

⑤ Раевский (1930), c. 141-144, 161-162; Гусейнов и др. (1960), c. 555-557, 570-571.

⑥ Sany, Ronald Grigor, *The Baku Commune 1917-1918*, Princeton U. P., 1972; 高橋澄治『一九一七年、バクー団体協約闘争』『教養学料紀要(東京大学)』一九七九年二月号、二一九—二七三頁。

⑦ Altstadt (Mirhad), Andrey L., *The Azerbaijani Turkish Community of Baku before World War I*, Ph. D. disser. Univ. of Chicago, 1983; Id., *The Azerbaijani Turks*, The Hoover Institution, California, 1992; Swietochowski, Tadeusz, *Russian Azerbaijan: 1905-1920*, Cambridge U. P., 1985.

⑧ Altstadt (1983), pp. 268-273; Swietochowski (1985), pp. 37-46.

⑨ Altstadt (1983), pp. 268-273. \*本誌の新聞紙上の世論の分析。

⑩ Swietochowski (1985), pp. 38-40; Villari, Luigi, *Fire and Sword*

*in the Caucasus*, London, 1906, pp. 166-167.

⑩ Altstadt (1985), pp. 272-273.

⑪ Ibid., p. 174.

⑫ 労働運動の主要な史料は、史料集 *Рабочее движение в Баку в годы первой русской революции: документы и материалы*, Баку, 1956 [以下、P.15]、一九〇五年革命以前の活動については *Рабочее движение в России в 1901-1904гг.: сборник документов*, Ленинград, 1975 [以下、P.17]、回想集は *Из Прошлого: статьи и воспоминания из*

*истории бакинской организации и рабочего движения в Баку*, Баку,

1923 [以下、III]: *25 лет бакинской организации большевиков*, Баку,

1924 [以下、25A]、*煽動文書集*は *Листовки бакинских большевиков*

1905-1907гг., Баку, 1955 [以下、15B]: *Листовки каucasского союза*

РСДРП 1903-1905гг., Москва, 1955 [以下、15C] を使用した。なお、

“Баку” “Каспий” などの現地刊行物が利用できず、本稿は史料的

には制約があることを付記せざるを得ない。

## 第一章 一九〇五年までのバクー在住諸民族の活動

### 一 バクーの民族構成

バクーに近代的石油産業が発達するのは一八七〇年代以降である。石油産業の発展は外資系企業の資金力によるところが大きい。七〇年代にスウェーデン系のノーベル、八〇年代にロートシルトが参入し、この二者とアルメニア系マンタシヨフを頂点とした寡頭化が進行する。①この新興石油都市の今世紀初頭頃の姿をまず概観しておく。

バクーの人口は石油産業の発展以降急激に増大している。一八七〇年代には一万五千と言われた都市人口は一八九七年には一一一、〇九四人、一九〇三年には一五五、八七二人になり、油田地域を含めると二〇万を越えた。移民流入の結果、バクーの民族構成はロシア人三五・九%、「タタール」二六・一%、アルメニア人一六・六%、イラン国籍九・〇%となり、ロシア人が数的にはムスリムと拮抗する勢力になった。②

バクーの人口の大部分は流動的であった。例えば性比（女性百人当たり男性数）を見ると、都市全体で一六二・八、油田地帯では二九三・五にも及ぶ。③民族を問わず、労働者は単身の出稼ぎが多数を占めた。熟練工も大部分は遠方から派遣され

別表：バクーの石油労働者（1903）

	ロシア人	アルメニア人	現地ムスリム	その他	合計
精錬：事務員 (%)	101 (33.0)	100 (32.7)	15 (5.0)	90 (29.4)	306 (100.0)
：労働者 (%)	1014 (47.6)	237 (11.1)	724 (34.0)	154 (7.2)	2,129 (100.0)
採油：事務員 (%)	263 (23.8)	543 (49.1)	86 (7.8)	215 (19.4)	1,107 (100.0)
：労働者 (%)	2,325 (15.0)	2,372 (15.3)	8,376 (53.9)	2,466 (15.9)	15,539 (100.0)

出典：Altstadt (1983), p. 139.

斜体が最多民族。

たものだった。

バクーの労働者は階層分化が顕著であり、それが民族の線と重なり合っていた、というのが労働史上の通説で、種々の統計的分析がある。これらの研究によれば、ロシア人は上位の労働力、ムスリムは下位の「使い捨て」労働力、アルメニア人は中位に位置する。労働者の階層分化は、職種毎に細分され、諸種手当で格差を拡大された賃金体系からも看取できるといふ。主に不熟練工である「採油労働者」の過半は、ムスリムが占めていた。<sup>④</sup>

ムスリム労働者の大半は農村からの出稼労働者である。一九〇九年の標本調査では、帝国領内出身のムスリム労働者の八〇%、イラン国籍労働者の四九・五%が、何らかの農業収入を家計に計上している。<sup>⑤</sup>ムスリム出稼労働者は農村と強い紐帯を持つ「農民的労働者」だった。

有主の位置にあった。石油業主会議評議会の首脳部はアルメニア人が多数を占め、証券取引委員会にもムスリムの姿はない。<sup>⑥</sup>このため、アルメニア人に対するムスリムの経済的劣等感が推定されてきている。<sup>⑦</sup>

しかしアルツタットはアゼルバイジャン・コミュニティの弱体性を否定し、逆にムスリムを「バクーの事実上の統治者」と規定する。<sup>⑧</sup>彼女によれば、小石油企業そのものの活況に加えて、バザール商人層や海運・造船・煙草・織布等の分野でのムスリムの優位があり、ムスリムはアルメニア人も経済的に拮抗していた。<sup>⑨</sup>また、政治的にはムスリムは優位に立っていたという。市会において、ムスリムの議席数を制限する条項は実際には空文に近く、その発言力は強かった。ロシア人が県・市の諸機関の長と行政事務を掌握し、ムスリムが市会に影響力を持つ一方、アルメニア人は行政構造から疎

外されていた、というのである。<sup>⑩</sup>

帝政ロシア民族政策の趨勢を考慮すれば、彼女の指摘は正しいと思われる。ムスリム有力者層の多くは帝政に馴致されていた。行政的「優位」を享受するムスリムの一部は、民族衝突に関与することになる。

## 二 諸民族の「権威」

ムスリムとアルメニア人には、それぞれ民衆の支持を集める集団が存在していた。いずれも民族衝突の舞台で重要な動きを見せている。以下、ムスリムの二階層とアルメニア民族主義活動について概観する。

「ゴチュ」<sup>⑪</sup>と警官　ムスリムの世俗的権威である。「ゴチュ」とは企業や個人の自警団となった、窮乏化したベク<sup>⑫</sup>地主貴族を指す。彼らは厳格な名誉観念を持ち、ムスリム民衆に権威が高かったという。メンシェヴィキ系活動家のプロイドは、彼らを企業の手先、「反動の走狗」、民族対立の煽動者と規定している。<sup>⑬</sup>

「ゴチュ」は、特に油田地帯では、警察権力をも事実上代行した。油田地帯では行政的整備が行き届かず、警察組織は空洞化していたのである。かなりオリエンタリズムの入ったものであるが、一英国人企業家の回想を引用すると、

……油田地帯で窃盗行為は余りにも深刻であり、警察は余りにも無能だったので、地区で最も名の通ったならず者の幾人かを雇う以外に安全確保の道はなかった。悪党共から供給される、この武装した警備人は、卑しむべき殺し屋であり、ボイラー室でも何処でも、碌に警戒もせずにぐうぐう寝ていられるのだ。窃盗行為があると、強盗共とその元仲間の警備人連中との間に一悶着あって、その後直ぐに、失くなっていったものか、それと同価値のものが戻ってくるという訳だ。……<sup>⑭</sup>

即ち、「ゴチュ」の権威はマフィア的なものだったのである。

この自警団は労働運動の激化に伴って強化されている。一九〇五年六月一九日には、石油業主集会から臨時総督宛に請願書が出されている。そこで請願主たちは油田地帯の治安の悪化を憂い、安全を保障できない油田地帯の警察に代えて「我

我企業主の任意に組織する警備隊」を正式に認可する事を訴えている。同文書は「油田・工場地域の全ての警察」の解任、軍隊の必要最小規模までの縮小をも訴え、「武器取引が行われている」哨舎の閉鎖を主張する。警備隊設立を準備する委員会として、この文書に連記された一五人の企業主名には、ムスリム系の名が多いとはいえ、アルメニア人大企業の企業主グカソフ(グカシャン)や、ロートシルトの代理人ファイグルの名も見える。大企業主は、民族出自に関係なく、労働運動への対応がある程度協調して行っていた。この請願の一部は受理されたという。<sup>⑭</sup>

「ゴチュ」やレズギン人<sup>⑮</sup>山岳民族を主体とする企業の自警団は、油田地帯において警察・軍に代替し得る可能性を持つ、相当規模の統制力を備えていたのである。

また、警察・軍の油田地帯における「無能力」の内実にも注意したい。哨舎での武器取引への言及から明らかのように、企業家は警察・軍を秩序の積極的攪乱者として認識していた。後述するように、同時代の世論は二月衝突の原因を政府の煽動に帰していた。

それでは警察・軍の状態はどうだったのだろうか。軍については民族構成を示す史料がない。警察関係者に支配民族たるロシア人が多数を占めた事は当然予想されるところだが、一九〇五年までにはムスリムの警官もかなり多数存在している。行政職員の民族構成についての統計も乏しく、一八九七年の統計では、バクー市の行政・司法・警察職員は総数一〇〇人で、その内ムスリムは二三人である。<sup>⑯</sup>しかしこの年に親ムスリム的なゴリツイン公が総督に就任していることを考えると、ムスリムの比率は一九〇五年までに更に増大を見せた筈である。誇張であろうが、一九〇五年にはザカフカス全域で「警官は事実上全てタタール人であった」との観察もある。<sup>⑰</sup>

警察に登用されたムスリムは、宗教的・地縁的結合を維持しており、情実が公務に影響する事も多い。例えばムスリムの社会主義者エフエンディエフは、一九〇四年頃には逮捕されかかるが、父親が憲兵隊通訳を勤め、ムスリムの憲兵隊長と知己であったため、見逃されている。<sup>⑱</sup>民族衝突の経過を見ると、ムスリム警官にも「ゴチュ」出身者が多かったと思わ

れる。こうした地縁的結合は二月衝突で最大限に活用されるのである。

市街部のムスリム警官と、油田地帯の「ゴチニ」の自警団は共に、労働運動の敵対者となった。<sup>⑭</sup> 少なくとも、バクーと地縁的結び付きを持たないイラン移民も参加する労働運動の舞台では、「ゴチニ」の権威は限られたものであった。

モッラー ザカフカス全土で「アルメニア人と対立したのはシリア派のみであった」との観察を考慮すれば、バクーで多数を占めたシリア派の宗派的影響も考察しなければならない。

帝政ロシアのシリア派は宗務局の管轄下であり、上級法学者層の司法権などは大部分剥奪されたが、貴族に準じた待遇が与えられ、下級のモッラーも国税免除などの特権を享受している。即ち、スーフィーなどは異なり、シリア派宗教師は帝政と直接対立してはいない。<sup>⑮</sup>

シリア派の宗教師の中でもモッラーは、読み・書き・コーランの教育者、また庶民の相談役として、高位法学者層とは対照的に、民衆に威信があったとされる。ロシア領アゼルバイジャンでは、イランのようにモッラー層からムスリム近代主義者も現れる一方、モッラー一般は頑迷な保守的勢力として近代主義者の批判の対象となっている。<sup>⑯</sup>

彼らの政治的意識を示す史料は少ない。僅かにヴィッラーリの著書に、アルメニア人のパンフレットからの引用がある。その中で、一モッラーはキリスト教徒一般に反感を露わにし、ザカフカスからの異教徒追放とイランへの復帰を主張している。<sup>⑰</sup> 報告者の性格上、これには誇張もあるだろうが、保守的モッラーの政治的意見の一例と言えよう。帝政ロシアの支配への直接的反対は控えつつも、異教徒排斥を唱えるモッラーは多かったようである。<sup>⑱</sup>

因みに、啓蒙活動などムスリム近代主義者の活動が本格化するのには、一九〇五年の一〇月宣言以降である。それ以前の時期について、彼らの活動の労働者への影響は無視してよい程度であった。<sup>⑲</sup> 労働者の日常生活は宗教的権威の影響を強く受けていたのである。

アルメニア人組織「ダシナク」 アルメニア人は強力な民族主義組織を持っていた。労働運動上も彼らの勢力は無視し

得ない。諸ゼネストはアルメニア人諸組織の協力も得て行われているのである。

バクーで社民系組織に対抗する影響力を誇ったのは、アルメニア革命家連合<sup>②</sup>通称「ダシナク」である。この党派は元オースマン帝国領内の活動を主としていたが、その活動の閉塞・帝政ロシアの政策変化・ザカフカスの経済的發展に伴い、活動の舞台をザカフカスに移す。

従来、対オースマン政策上、親アルメニア的だった帝政ロシアの政策は、民族主義への危惧から、一八九〇年代に反アルメニアに転換する。その頂点が一九〇三年七月のアルメニア教会資産収用布告だった。キリスト単性論を採る独立自治のアルメニア教会は、アルメニア人の民族的象徴でもあり、この布告は民族の危機と受けとめられる。同年夏に「ダシナク」は「自衛のための委員会」を設立し、バクーに本部を置く。九月二日にはバクーで抗議デモがあり、一〇月には別組織「フンチャク」がザカフカス総督暗殺未遂事件を起す。「ダシナク」は一九〇四年二―三月の党会議で反帝政を綱領化し、エスエルに接近している。<sup>③</sup>

一九〇四年一二月の報告によれば、「ダシナク」は全ザカフカスに九二五のサークルを持っていたが、内バクーは二六五と、一地区としては最多数のサークルを擁した。<sup>④</sup>「サークル」の構成人数が不明なため正確な比較は出来ないが、四千人と言われるバクー労働者連盟（後述、以下「連盟」と較べても、数的にも無視できない勢力だった。

「ダシナク」の主な活動は、帝政ロシア政府要人の政治的テロルと、農村での武力による政府機関ボイコットだった。バクーでは労働運動にも参加している。一九〇五年の一二月ゼネスト時には組織間交渉に参加し、協力的態度をとっており、それ以降も「連盟」とある程度共同歩調をとっている。<sup>⑤</sup>その他、バクーではアルメニア富豪から「祖国解放税」を取立ててもある。これに協力的な富豪も少なくなかったが、武力的な威嚇に訴える場合も多かったという。<sup>⑥</sup>

彼らの政治的理想は、社会主義と地域自治・文化自治であり、その「カフカス共和国」構想は必ずしも他民族を排除するものではない。<sup>⑦</sup>しかし、民族主義の強さ、民族としての凝集力の強さと、その武装組織としての実体性のため、また政

府の煽動もあり、「ダシナク」は他民族にとって、アルメニア人の「脅威」を体現するものとなった。<sup>⑧</sup>

ザカフカス行政当局は世紀転換期には特に民族運動への警戒を強めている。獄中で「ダシナク」成員から「ほら、君達社会民主主義者はかくも簡単に釈放されてしまう」と皮肉られた、というロシア人活動家の回想もある。民族衝突当時も、外国での報道とは対照的に、バクーでは「外国人は〔も〕殆どタタールに同情的」であった。<sup>⑨</sup>「カフカスのユダヤ人」アルメニア人は一般的に嫌われており、オスマン帝国での「虐殺」の記憶を持つアルメニア人もムスリムに好感情は持っていないかった。

### 三 ロシア社会民主労働党の活動

バクーの石油産業は一九〇一年から不況の影響を強く受ける。<sup>⑩</sup>この不況を背景に、ロシア社会民主労働党がバクーでの活動を本格化する。

一九〇五年までの労働運動の進展に関しては、機会があれば別稿で詳述したい。ここでは注目すべき特徴についてののみ述べる。

社会民主労働党の活動の主対象は、キリスト教民族の熟練工であった。一九〇二年以降のメーデーの示威行進の主体は民族的にはロシア人とアルメニア人である。<sup>⑪</sup>「アルメニア教会の聖体礼儀終了が一時三〇分なので、教会から出る会衆を掌握」するために集結場所・時間が調整されている。煽動文書・宣伝活動の使用言語もアルメニア語・ロシア語が支配的であった。メーデー自体も、「五月一日」のゼネストと、日曜日、即ちキリスト教の安息日の示威行進から成立していた。

社民党は一九〇三年七月のゼネスト前後から、油田地帯の労働運動にも積極的に関与していく。<sup>⑫</sup>ただし、活動家の「人手不足」は深刻で、他地域から人材が「輸入」されているが、ムスリム言語話者の補充は困難だった。

一九〇四年にはロシア社会民主労働党の分裂がバクーに波及する。「バクー委員会」は後のボルシェヴィキ系の組織となる。一方でシェンドリコフ兄弟の率いる「連盟」<sup>⑧</sup>「バラハニ・ビビ・エイバト労働者組織」(一九〇五年五月一日以後「バクー労働者連盟」)が、「経済主義」的主張によって労働者の支持を集め、メンシエヴィキ系の組織として隆盛する。年末までに「連盟」の成員は、バクー委員会の三〇〇人に対し、四〇〇〇人を数えたという。<sup>⑩</sup>

一九〇四年二月ゼネストは両者の協議によって開始されたが、武装蜂起をも主張するバクー委員会に対し、経済的要求を絞った「連盟」が優位にあった。「前掛けや手袋の支給」などの「些末的要求」を掲げる現実主義的戦略が、労働者の支持を得ていたのである。<sup>⑪</sup>

このゼネストの結果、労働団体協約が締結される。しかしその恩恵を受けたのは主に大企業に属する熟練工だった。団体協約の二三項の内には、九時間労働日・休日遵守・体系的超過労働の禁止などの一般的条項や、下級職種の最低賃金設定など、不熟練労働者に配慮した条項はある。しかし、旋盤工への熟練助手充当・職人への住宅費支給と灯油や飲料水の支給という専ら熟練工向けの規定もあり、更に、疾病時の俸給半額支給(三ヶ月間)・月二度の給与支払・遠方出張時の日給加算・浴場無料入場券の毎週配布など、継続雇用を前提とした条項も多い。<sup>⑫</sup>

団体協約の履行自体、迅速には進まなかった。油田地帯の住宅整備や浴場建設は早急には実現されなかった。また下請企業・小企業での協約履行は特に遅れている。団体協約は高いレベルの要求を認めさせたが、その実際上の受益者は大企業に限られていたのである。よって、後述するように、一九〇五年の労働運動の主体は不熟練労働者となる。

さて、ムスリムの間にも労働運動への指向はあった。既に、ムスリムへの宣伝活動が本格化していない一九〇三年七月ゼネスト時に、「ムスリム・ペルシャ人が労働状況改善に積極的に戦った」とする観察も、否定的な観察と共に出されている。バクー委員会は、熟練工中心の「連盟」に対抗して、ムスリムへの影響力拡大を模索している。これはムスリムの啓蒙組織「ヒンメト」の提携も得て行われている。<sup>⑬</sup>ただし、「ヒンメト」活動の本格化は一九〇六年以降だった。また、

バター委員会自体、その活動目標はムスリムの「政治的覚醒」であり、現実主義的な「労働運動」は苦手であった。<sup>⑭</sup>  
 「連盟」にもムスリム労働者への宣伝の意志が無かった訳ではないが、中心はキリスト教徒／熟練工の労働運動だった。ムスリムはその活発な活動から疎外されていた。一方、バター委員会の活動は政治的・啓蒙的なものに偏していた。いずれの組織も、一九〇五年までにはムスリム／不熟練工を活動に取り込めなかった。ムスリムから見れば、バターには他民族の労働運動と政治的言説だけがあったのである。

- ① ハッー石油産業の概観を、Нантшвилли, Н.П., *Экспансия иностранного капитала в Закавказье*, Тбилиси, 1988; Henry, J. D., *Baku: an Eventful History*, London, 1905; Gerritson, F. C., *History of the Royal Dutch, Avois, E. J. Brill, The Hague, 1956-1957*, Vol. 2; [岡田進]「第二章 工業の発展と石油の発見」、『石油』大崎平八郎編著『ロシア帝國主義研究』“ニキニナマ書房”、一九八九、六九—七十七頁。
- ② Altstadt (1983), p. 64, 典拠を *Перечисление населения гор. Бакы, 1903*, Baky, 1905 (筆者未見)。
- ③ Henry (1905), p. 12.
- ④ Altstadt (1983), pp. 130-174; 高橋清和(一九七九)一三三—三九頁、別表を参照。
- ⑤ Altstadt (1992), pp. 142-143.
- ⑥ Villari (1906), p. 188.
- ⑦ Sunny (1972), pp. 3-27; Swietochowski (1985), p. 39.
- ⑧ Altstadt (1983), p. 11; Altstadt (1992), p. 43.
- ⑨ Altstadt (1983), pp. 180-183, 47-49.
- ⑩ Altstadt (1983), pp. 93-97. 中政制及びその下に Мухаман, А.Ш., *Политический строй Азербайджана в XIX-начале XX в.*, Baky, 1966, c. 208.
- ⑪ Altstadt (1992), pp. 38-39. 引用を *Essad Bey, Blood and Oil in the Orient*, N. Y., 1937, p. 23 (筆者未見); Brodjo, Eva, *Memoirs of a Revolutionary*, Oxford U. P., London, 1967, pp. 68-71.
- ⑫ Thompson, Arthur Beeby, *Oil Pioneer*, London, 1961, p. 68.
- ⑬ *PLB*, No. 168.
- ⑭ “Mogzauri” No. 32.
- ⑮ ノベキン人など山岳諸民族は「地元ムスリム」から異分と見られ、チカノカスの帝國支配で重用された。Thompson (1908), pp. 375-376.
- ⑯ Altstadt (1983), pp. 61-62. その内訳は、ロシア人七〇ノムスリヤ一三ノノムスリム一三ノその他一五六名。
- ⑰ Villari (1906), pp. 170-171.
- ⑱ 25a (Фензиев), c. 196-197.
- ⑲ バター委員会自身を「黒百人組」視して、ЖКС, No. 159, 175.
- ⑳ Villari (1906), p. 161.
- ㉑ 宗派別の統計は存在しない。バター周辺にはシーア派が多数を占め



業主の間では「法的というより倫理的義務」と見られていた、という証言が引用されている。

⑩ Paroba (1907), c. 102.

⑪ 「ソムニム」のひびくは Swietochowski, "The Himmät Party: Socialism and the Nationality Question in Russian Azerbaijan, 1904-1920," *CMRS XIX* (1-2), Janv.-juin 1978, pp. 119-142; Altshat (1983), 256-267; *HT* (Shpenmen), c. 39-57 を参照。

## 第二章 二月と八月の民族衝突

先行研究はバクーの二度の衝突の差異に注目せず、双方等しく政府煽動の結果と解している。二月衝突に端を発した二民族の武装衝突の全てが元々は統治当局の企画したものだった、という理解の限りではそれは正しい。しかし結論を先に言えば、バクーの八月衝突については政府煽動論は直接には当てはまらない。二度の衝突を比較して、それを明らかにした。

### 一 二月衝突（二・六―二・八）

「血の日曜日」事件の報道直後から、バクー委員会も「連盟」も反政府宣伝を本格化している。「農奴解放記念日」二月十九日には政治的ストライキも計画されていた。<sup>⑫</sup>当局の煽動はこれら政治活動の高揚に対する対応である、と一般には捉えられている。しかし、二ヶ月前から「噂」が流布していることを考慮すれば、煽動には労働運動対策としての側面も見ろべきであろう。<sup>⑬</sup>一月の県知事上京前後の時期に、県知事・警察署長を中心に民族対立煽動が立案・許可された、と推測されている。

「噂」はムスリムの間に「アルメニア人によるムスリム虐殺」の噂として流れていた。更に、警察がムスリムの陳情に

⑫ バクー委員会の活動について自己批判的な *254* (Poxanni), c. 76-79 を参照。

⑬ Broido (1967), pp. 70-71; Сухов, А., "Три нечестна работни в Шенджикской тюрьме," *МР* 10 (45), 1925, c. 124-125. 「ソムニム」に堪能なロシア人が招致され、通訳を介した宣伝活動の試みもあった。

応えて「自衛のための」武器を彼らに提供している。

この事態は予め労働運動側にも通報されているが、重視されていない。衝突の一週間前に「ヒンメト」指導者の一人セイド・モフスーモフがバクー委員会協力者のヴァシリエフ・ユージンに「噂」と武器供与について報じ、即日会議にかけられる。しかし委員会の大多数はその現実性を疑っている。取りあえずアゼリー語の警告文書が出されてはいるが、アルメニア人からも「全くその可能性はないと一笑に付され」ている。<sup>④</sup>

つまり、アルメニア人・ロシア人の活動家は民族衝突の前夜に全く危機感を見せていないのである。民族衝突は少なくとも非ムスリム住民にとっては全く予期せぬ出来事だった。先鋭化した敵対の構図は非ムスリム住民には意識されていない。<sup>⑤</sup>

しかし、一部のムスリムは年初から緊張を高めていた。二月六日に、一アルメニア人との喧嘩でムスリムが射殺された事件が、衝突の発端もしくは口実となる。ムスリムが遺体を運んで行進し、夕方から市街各地でアルメニア人商店の略奪と放火を始めている。<sup>⑥</sup>

攻撃の主対象はアルメニア人商人だった。「ダシナク」の武力もアルメニア人攻撃の口実になり、「武器や爆弾が貯蔵されている」との噂から襲撃された家もあったという。しかし第一に襲撃・放火・略奪の対象となったのは商店と富豪の邸宅だった。「タタール人街区に多く店を持ち」「殆ど地区全体を支配していた」ララエフ宅や「無慈悲な地主」アダモフ宅が包囲され、銃撃戦の後に放火されている。商店略奪は組織的に行われ、略奪品の「公平な」分配がなされている。<sup>⑦</sup> 周辺農村からの入市の動きもあり、「ゴチュ」<sup>⑧</sup>と村民との結びつきを示唆している。

県知事・警察署長・分署長を筆頭とするロシア人やムスリムの政府職員が、衝突前から煽動を行い、かつ二月衝突中もムスリムに積極的に援助を行ったとの証言が、多くの目撃者から出されている。市内を巡回した警察と軍隊は、しばしばムスリム「暴徒」と遭遇したのに、「発砲は許可されていない」として何ら対策を講じなかった。救援を求めるアルメニ

ア人は無視された。加えて、商店略奪を兵士・警官は「単に黙認するばかりでなく、自らも積極的に参加」し、警官と「暴徒」の間にはしばしば親密な関係が見られた、という。<sup>⑧</sup>

アルメニア人も、「ダシナク」「フンチャク」成員の青年を中心に各所で応戦した。しかし組織的な抵抗はできず、火力の面でも「政府支給の」武器を大量に持つムスリムが優っていた。死者数はアルメニア人二一八名、ムスリム一二六名との公式発表があるが、特にムスリム側の死者数は不正確であるという。

二月九日には市内は鎮静化する。アルメニア教会とシーア派の宗教者共同の、和解をアピールする平和行進が政府によって組織される。この行進は予定された偽善的行為と見られ、評判が悪い。<sup>⑩</sup>

住民の対応を見てみたい。ムスリム住民の多くは、衝突に関与していない。鎮静化と殆ど同時に、当局への抗議集会が発生している。バター弁護士集会、証券取引所委員会、石油業主会議評議会はいずれも地方当局の無為を非難し、真相究明のための委員会の指名を要求している。また一三日から一六日にかけて、「民族・階層を問わない」数千人規模の集会が連日開かれ、ムスリムも発言している。その決議は「アルメニア人とムスリムとの間には如何なる人種的・宗教的敵意も存在しなかった」とし、警察・軍隊のムスリムへの武器援助と意図的傍観を非難し、公開法廷での審理を要求している。市会議員も非難声明を出したという。<sup>⑪</sup>

衝突は市街部に限られていた。油田・工場地帯では労働者の自衛組織形成もあり、襲撃・略奪行為の範囲外でもあったせいか、衝突は広まっていない。<sup>⑫</sup> 八日から抗議集会とストライキがあり、これは多くの企業主にも好意的に迎えられたという。市街部の集会にも「労働者の代表」が参加し、その成果でか、二月一六日の集会決定には「専制打倒！ 人民の敵打倒！ 憲法定議会万歳！」のスローガンが付されている。<sup>⑬</sup>

「ダシナク」も直接ムスリムを非難する声明は出さず、県知事・副知事・警察署長に、その煽動行為を断罪する脅迫文書を送り付けている。<sup>⑭</sup> 実際、県知事のナカシゼは五月一日に「ダシナク」によって暗殺されている。<sup>⑮</sup>

ムスリムも含めたバクー住民の反応は、二月衝突の主体が限定されたものであったことを示している。衝突前に「如何なる民族的・集团的敵意も無かった」との決議が繰返し出され、活動家達も「全く予期せぬ事件」としてこれを回想しているのは、非ムスリム側の単なる見過ごしではないだろう。この衝突は、県知事と警察によって立案され、警察機構と結託する「ゴチュ」の参加・指導によって実行に移された事件であった。衝突以前の両民族間の関係は、良好とは言えないにしても、武力衝突を想定させる程のものではなく、一部ムスリムを除き、都市と油田のムスリムの多くは、この衝突には無関係だった。

## 二 八月衝突（八・二〇—八・二六）

二月衝突の報道後、両民族の武装対立の構図が形成され、ザカフカス各地で衝突が散発し、両民族間の敵意は累加的に強められる。<sup>⑭</sup>バクーでの二度目の衝突がより大規模になったことは、ある意味では当然とも言えよう。しかし、現地当局の対応は明らかに二月とは異なっている。

八月衝突は八月ゼネスト失敗直後に起こっている。ゼネストについては後述する。市街部では、一六日から印刷所・小規模工場の若干がストライキを行っている。一七日に鉄道馬車従業員がストに加わり、鉄道馬車は兵士が代行して動かし<sup>⑮</sup>ている。これが衝突の発端となった。

二〇日午後六時に鉄道馬車従業員が騒動を起こし、操車中の兵士に発砲する。住居の窓や屋根からも兵士に向かって発砲が行われた。<sup>⑯</sup>

同月のシュシャ衝突の報道後高まっていた両民族の警戒心を、この銃声が刺激したのだろう。同刻頃、路上のアルメニア人三名に辻馬車からの銃撃があり、一名が死亡する。その他類似の事件が市内に頻発し、翌朝までの死／傷者は、警察の確認するだけで、ムスリム八／一名、アルメニア人三／七名を数えている。ロシア人の死／傷者は一／二名のみであ

る。既に市内で放火の動きもある。<sup>⑮</sup>

二一日日曜日、市内各地で銃撃戦が始まる。<sup>⑯</sup>油田にも、市内の「ボグロムの開始」が電話で報じられ、ムスリムの集会が各所で開かれている。バラハニ油田ではこの日には大きな混乱はないが、多数のムスリムが鉄道沿線に集まり、夜にはラマニ油田からも数百名の武装したムスリムが来ている。ビビエイバト油田でもムスリムの集会があり、発砲や、野営中の軍隊に対する放火の試みも見られた。アルメニア人はザブラトのマンタシヨフ（アルメニア人）工場や、サブンチの病院等に待避する。多くのアルメニア人は武装していたという。<sup>⑰</sup>

二二日から、バラハニ・ラマニ・サブンチ・ザブラトで放火・略奪・銃撃戦が始まる。アルメニア人の待避していた、バラハニの技術協会会舎や「ヴォタン」社はムスリムの襲撃を受けるが、カザークが応戦・撃退している。マンタシヨフ工場は包囲戦の様相を呈する。<sup>⑱</sup>同日、臨時知事は午後八時以降の外出禁止令を発する。<sup>⑲</sup>周辺農村から油田へのムスリムの動きもあり、バラハニのバクー守備隊長は増援を要求している。<sup>⑳</sup>

既に二三日に、石油業主会議評議会副議長の声明によれば、油田の炎上は「空前の規模」で、「現在、油田は事実上既に存在していない」<sup>㉑</sup>。

二四日も「自体は極度に深刻である」。内務省に軍隊増援が要請されている。同日夜に海上で略奪船団の動きがある。<sup>㉒</sup>

二五日には市内の銃撃戦は鎮静化へ向かったという。この日ザブラトに砲兵隊・歩兵・カザークが派遣され、マンタシヨフ工場が解放される。<sup>㉓</sup>同日皇帝ニコライⅡ世から代官に、事態の「停止にあらゆる手段を講ずる」事を望む指令が出される。<sup>㉔</sup>バクー油田の炎上は「全ロシアにとって」経済的に重大な損失だったのである。

二六日には油田も鎮静化に向かう。同日、戒厳令が強化される（「包囲状態」）。油田の火勢は翌日まで続く。<sup>㉕</sup>

放火活動の対象はアルメニア人所有油田が多かった様だが、延焼もあり、油田の三分の二近くが灰塵に帰した。<sup>㉖</sup>死者数は不明だが、六〇〇名との推定は二月の死者数と比較して小さい様に思われる。多数の労働者が職場を失い、「四万人」

がバクーを離れたともいう。<sup>⑧</sup>

八月衝突と二月衝突との間には幾つかの点で顕著な相違がある。

構図としては、八月衝突も「ムスリムによるアルメニア人への襲撃」だった。加えて二月同様、警察の一部の協力も見られない訳ではない。<sup>⑨</sup>しかし軍隊は明らかにアルメニア人を保護し、ムスリム「暴徒」を攻撃している。バクー委員会の一活動家も言うように、「地元権力も今回は消極的傍観者ではなく、秩序の保護者として行動した」のである。<sup>⑩</sup>政府煽動論は成立しない。

略奪行為には周辺農村の住民も大規模に参加している。対立する活動の乏しい農村地域では、「ゴチュ」層の権威は大きかったのであろう。八月には油田でも、自警団の成員たる「ゴチュ」が活発に活動している。

また八月にもムスリムがアルメニア人を匿う「美談」は多く、<sup>⑪</sup>ムスリム知識人・ブルジョワの多数は民族衝突には参加していない。

ムスリム労働者の動向に関する記録は少ない。そもそも多くの活動家がこの事件に対しては寡黙である。しかし彼らが事件中に積極的な対応を行った(行えた)形跡はなく、二月のような労働者の抗議活動も八月にはない。幻滅の感情が活動を支配しており、多くの、特に「連盟」系の派遣活動家は、失意の裡にバクーを離れている。<sup>⑫</sup>

活動家の幻滅の原因は、ムスリム労働者の民族衝突への参加であったと思われる。労働者の民族衝突への参加を示す若干の記録がある。二四日、バラハニで歩兵大隊・カザーク中隊・地元警察が「労働者に包囲され」ている。<sup>⑬</sup>同日、ビビ・エイバトではカザークと警察署長が、「ムフタロフ油田の労働者を訪ね、彼らがアルメニア人との戦いを停止するという約束を取りつけ」ている。<sup>⑭</sup>

対抗活動が皆無だったことと、活動家の幻滅を考慮すれば、民族衝突に参加したのが労働運動に反対するムスリムのみ

だったとは考えにくい。現地当局の態度の変化、それにも関わらず労働者が民族衝突に参加したことが、二つの衝突の間の最大の相違点である。民族間緊張の単なる累加的増大が、労働者参加の理由なのだろうか。二月から八月のバクーの状況、特にムスリム労働運動の関係を辿る必要があるだろう。

- ① Раевский (1930), c. 139-141; Львов, А., "1905 год в Баку", *Новый Восток*, 1926, c. 133-134.
- ② ムンスタイン自身の証言 Henry (1905), p. 135; P. 116, No. 88 を参照。
- ③ 25a (Васильев=Ожнин), c. 56.
- ④ ИП (Стомани), c. 17 ムンスタインは民族衝突を「バンター委員会や他の発組織のみならず、一般に全ての者にとって全く予期せぬ」事件だったと述べている。ウマシリヒン=ユーシンはこれに反論し、本文で述べた「予兆」を紹介している。ムンスタインはその後再反論し、ボツロムの噂が非現実的なものとして全く留意されていなかった事を、数人の活動家の回想を引用して実証している。Васильев=Ожнин, М. И., "В огне первой революции", ПР 2 (49), 1926, c. 125-161; 25a (Васильев=Ожнин); Стомани и Георгиев, "Ещё о резне 1905г. в Баку и выступлении нашей организации", ПР 5 (52), 1926, c. 251-257.
- ⑤ "Могучий" No. 5; Henry (1905), pp. 155-157; Villari (1906), pp. 193-195; 25a (Васильев=Ожнин), c. 58. 事件の詳細については報告者毎に異同があり、例えは殺害現場における場所や被害者がいる。ムルメニフ人兵士による、脱走を試みたムスリムの射殺を遺囑とする史料も多し。
- ⑥ 一〇五名の目撃者の証言を元に構成されたアララツキー (ルンケウツキ) の *Сынъ Араратскій*, В (В.-В. В. Гуневичу), *Подвигъ Царизма: кровавые февральские дни въ Баку*, Женева, 1905 年。
- ⑦ 「バンターの流血の争いは政府の扇動の結果である」ことを実証しており、二月衝突の記述はこれに負うところが多し。ルンケウツキはユスエルの亡命指導者の一人。所収の証言は主にバンター弁護士協会の委員会とチフリス市会の委員会によって集められた。一〇五名の内訳はアルメニア人五七、ロシア人二四(二を含む)、ユダヤ人八、グルジア人四、ポーランド人四、ムスリム二、その他外国人六名。商店襲撃・略奪・放火行為については 25a (Васильев=Ожнин), c. 56; Henry (1905), pp. 157-161 を参照。
- ⑧ Араратскій (1905), c. 5.
- ⑨ Так же, c. 39-44; Львов (1926), c. 134. 二月衝突中に到着の増援部隊が、駅構内で待機を指令されたとの証言もある。この増援の目的が、民族衝突そのものの鎮静化ではなく、その後に予想される混乱の收拾だった事は明白である。Араратскій (1905), c. 48.
- ⑩ Львов (1926), c. 135. 政府の調査委員会による。
- ⑪ Стомани и Георгиев (1926), c. 256; Араратскій (1905), c. 27-28, 37.
- ⑫ Так же, c. 58-60, 68-77; Стомани и Георгиев (1926), c. 257; Львов (1926), c. 137; Раевский (1930), c. 141-144.
- ⑬ ただし、Львов (1926), c. 135 によれば、ムンスタイン=サブンチ=ラフニで三名のアルメニア人と五名のムスリムの死亡者が出ている。
- ⑭ 25a (Васильев=Ожнин), c. 60; P. 116, No. 90; Васильев=Ожнин (1926), c. 158-160.

- ② Apaparckii (1905), c. 18-19.  
 ③ Villari (1906), p. 196; Jhaos (1926), c. 140.  
 ④ 各地の事件を總べてのこしは Villari (1906), pp. 197-199, 218, 270-274.  
 ⑤ *PJfS*, No. 200, 201, 203, 204, 205.  
 ⑥ *PJfS*, No. 206; Henry (1905), p. 174.  
 ⑦ *PJfS*, No. 206, 208.  
 ⑧ Henry (1905), p. 176.  
 ⑨ 日軍の大隊を記録した中隊を總べては Henry (1906), pp. 171-213  
 ⑩。  
 ⑪ Henry (1905), pp. 179-181, 188-189, 204-205.  
 ⑫ *Ibid.*, pp. 183-184, 195, 205.  
 ⑬ *PJfS*, No. 211.  
 ⑭ *PJfS*, No. 209. *PJfS*, No. 216, 217; Henry (1905), p. 212 参考  
 照。

- ⑮ Henry (1905), pp. 211-212, 215-216. 破壊された油井は「三〇〇  
 〇ガレハ六田(六〇・一〇) (掘削中・一時休止中の油井を含む)。  
 ⑯ Villari (1906), p. 203.  
 ⑰ *Istcpa*, No. 110; Cyxos (1925), c. 140.  
 ⑱ *Cyxos* (1925), c. 137.  
 ⑲ 254 (Hopnickii), c. 130. 八月衝突を「シヨンスキーはヤキストの  
 不成功に乗じた当局の反動と捉えてゐる。ノルンバットは油田の大火  
 の後に政府が民族対立を挑発して「懲りた」を叫びつゝ。事件当時の軍の  
 動向をその「シヨンスキーの論議」に不適切なものを「シヨンスキー」  
 c. 161-162; Alstadt (1983), p. 169; Alstadt (1992), pp. 42-43.  
 ⑳ 例として Henry (1905), p. 198; Villari (1906), p. 203.  
 ㉑ 「その数日前には油田地帯の生活に決定的影響力を持つていたか  
 ら見た我々の強力な組織は、恐ろしい破局を避けるには無力であら  
 ない」 Broide (1967), p. 114. 「皆は自分の無力を感じた」 Cyxos  
 (1925), c. 141. (以下「連盟」)「詳細には書きたくなら」 254 (Hopnickii  
 hectii), c. 131. (ベクター委員会)。衝突後に出されたベクター委員会の  
 扇動文書 *JfS*, No. 74 にも悲観的調子が顯著である。プロイド、ス  
 ーホンは衝突直後にベクターを離れる。

### 第三章 二月から八月へ——労働運動と民族対立——

#### 一 行政的変化

政府の煽動政策の弱化の問題は比較的容易に解ける。二月衝突後間もなく、ザカフカス行政が変化するのである。

二月二十六日、全地域的な争乱状態への対応として、ザカフカスに代官 Начальник 制が再導入され、ヴォロンツォフ・ダシコフ公が就任した。バクー臨時総督、カフカス警察長官等も新たに設けられている。代官は比較的自由主義的で親アルメニア的な政見を持ち、また「タタール」の啓蒙の必要性を説きつつ、「全民族の平等と自由」を謳っていた。<sup>②</sup>

統治機構には多くの保守派・反アルメニア派が残り、一朝一夕に政策転換はできなかった。それでもアルメニア教会資産収用布告は代官就任直後から再検討され、八月に正式に撤回されている。<sup>③</sup>

現地行政の人材自体も完全に再編成された訳ではない。しかし少なくとも他地域からの軍隊の大量派遣によって、地縁的結合の無い兵士が増加している。二月十八日にバクーに戒嚴令（「交戦状態」）が宣言され、一月に二七五名だった駐留軍隊は四月には八〇〇〇名を数えることになる。<sup>④</sup> 上部行政の変化と、地縁的結合のない軍隊の流入が、民族衝突への当局の対応を変えたのである。

## 二 メーデーから「五月ゼネスト」へ

労働運動の様相も二月衝突後大きく変化する。三月、バクー委員会はムスリムへの宣伝の強化を決定する。<sup>⑤</sup> 宣伝強化も一因となつてか、以後の運動には不熟練労働者／ムスリムの姿が一層目立つことになる。三、四月に目立った動きはなく、この傾向はメーデー以降明らかになる。<sup>⑥</sup>

五月一日は日曜日なので、四月三〇日と併せた二日間の祝賀ゼネストが計画された。これに「連盟」は反対する。ロフリンによれば、

……その理由はこうだ。一般的にムスリム労働者には、一日間の五月ストライキを長引く経済的ストライキに転化しようとする傾向がある。現在の状況ではその成功は無いであろうし、熟練労働者、即ちロシア人・アルメニア人の支持を得る事もないであろう。そしてそれは民族対立を煽るであろう。<sup>⑦</sup>

この予測にも関わらず、協議の末「連盟」もメーデー祝賀に合意する。「お祭で着飾った、平静な労働者の大群」がゼネスト挙行を監視し、油田では「ロシア人・アルメニア人・兵士」の演説がある。公園は青年学生で溢れ、日曜の午後七時には大騒ぎとなり、「柵を越え芝生に入り、木や茂みを破壊し、革命歌を歌う」が、警察は事態の複雑化を恐れて手を出さない<sup>⑩</sup>。油田でも「目立った暴力や混乱は無」く、ビビエイトでは労働者は木管楽器と酒でメーデーを祝っている<sup>⑪</sup>。この祝賀にムスリムの姿は無かったという。

五月一日は総じて「例年通り」のメーデーだった。一九〇三年頃からメーデーは労働運動に比較的寛容な企業主（特に外資系）の黙認するところとなり、一部では金銭的支援さえ受けている。ロシア人主体の酒宴に対しては、アルメニア人活動家の否定的な観察もある<sup>⑫</sup>。禁酒規定を持つムスリムは、この酒宴とは無縁だった。メーデー祝賀は、ロシア人／熟練工主体の活動だったのである。

さて、「連盟」の「心配は的中する」。二日になっても、最大業主ノーベルの「油田のムスリム」が操業を再開しない<sup>⑬</sup>。ビビエイトでは全油田・工場が、バラハニでは第四・五・六油田で「タタールが」操業を停止する。黒色街の工場も交渉に入る。翌三日には第三油田も「タタールによって」停止する。五日・七日に機械工場の労働者からも要求が出されているが、八日には操業を再開している。油田は動かない。

ノーベルだけではない。三日には「カスピ海黒海」社（『ポートシルト』）の油田、四つの掘削請負人、アラマズド社でもストライキがあり、更にシバエフ、ロシア石油、テルコポフの油田に及ぶ。八日までには「油田の三分の一」が操業を停止する<sup>⑭</sup>。多くの観察が確認するように、このゼネストを主導したのは油田地帯のムスリム労働者であった。

「自然発生的」運動の拡大を前に、労働運動組織の側も手を拱いている訳にはいかなかった。一〇日には、「油田の労働者の半数」がストライキ中である一方、工場・工房の多く（即ち熟練工の多く）は操業中という状況だったが、この日「連盟」がゼネストを宣言、「ダシナク」も煽動文書を出す。翌日にはバクー委員会がゼネストの確認と二五項目の要求を、

一二日に「連盟」も要求を提示している。<sup>⑤</sup> 一〇日以降「労働者による強制的なストライキの試み」が頻発し、「五一六人の労働者の徒党がストライキ参加を要求して回」った。宣伝の「政治性」のため、軍隊・警察は一〇日から巡回警備を行う。<sup>⑥</sup>

ゼネストの開始と同じく終結も、ムスリムの意向によって進められていく。臨時知事によって調停団が編成されるが、興味深いことに、この団長はムスリム僧（カーディー）であり、構成員の主体はモッラーと有力都市民・村民だった。この調停団の説得・交渉、企業主の若干の譲歩、また長期のストによる疲弊もあって、一六日に油田は概ね操業復帰する。例外的にノーベルの第三・四・六油田が復業を拒否し再交渉に移っている。雇主側は、最低日給の一〇カペイカ引上げ（日給一ルーブリ化）は受入れるが、ストライキ中の賃金支払は拒否する。この場合も最終的には、当該賃金の半額分による油田地帯へのモスク建設という、専らムスリムに向けた妥協案で手が打たれるのである。<sup>⑦</sup>

運動組織のムスリムへの印象は余り好意的でない。そもそも調停団の活動自体、活動家からは「反動的」なものに分類される。一九日にバター委員会が出したゼネスト失敗声明は、煽動されたムスリムを失敗の主原因とする。「カザークの鞭とガジンスキーら反労働運動の闘士に鼓舞された、暗愚なベルシャ人大衆のリヴォルヴァーと旋条銃」が運動に対抗した。油田では「ペルシャ人・強盗・ならずもの徒党を組織し、武装させ」、虐殺の威嚇によって復業が強制された、というのである。二四日付文書も「無自覚な同志の啓蒙」を焦眉の問題としている。

確かに「ゴチュ」層は労働運動と対立していた。またムスリム労働者の一部には、ストライキに反感を抱くものもいた。近郊農村からの出稼労働者の一部と、石油を運搬する腰高二輪馬車の御者は休業状態に不満で、活動家は彼らとの衝突の可能性を危惧している。<sup>⑧</sup>

だが一方で、ムスリムも不熟練労働者の、一二月の団体協約を最高の成果とする従来の労働運動への不満が、ストライキの誘因となった事も明らかである。ロフリンの回想によれば、不熟練労働者は団体協約に不満を抱いていた。<sup>⑨</sup> 一方、「労

働者は一二月スト後、石油業主からかなりの譲歩を得て、新しいストライキの遂行には恐らく乗り気ではなかった」との観察もある。<sup>②</sup>「連盟」の態度も併せて考えると、乗り気でなかった労働者が、主に熟練工であった事は明らかである。

しかし、運動が不熟練労働者主体のものであったにも関わらず、組織の出した明文化された要求を見ると、逆に、熟練工主体の要求項目が多い。ムスリムの安息日たる金曜日の休日化の要求が、バカー委員会の文書には取り入れられており、<sup>③</sup>一般的な賃上げ要求も常に立てられてはいる。しかし、どの要求も、一ヶ月の有給休暇・継続雇用による増給・年末のボーナス支給など、大企業雇用者・継続雇用者を射程に置いたものを中心になっている。また言論・出版・団結・集会の自由、油田地域への学校建設、雇用手事の委譲等、「政治的」な要求も多い。<sup>④</sup>「五月一〇日のストライキ声明は、政治的要求の塊から成り、それに付随する若干の経済的要求は、明らかに実現を期していない」と見る企業家もあった程である。<sup>⑤</sup>組織は不熟練労働者の経済的不満を汲み取れなかった。

運動統制上の問題もあった。人手不足のためか、「連盟」系の活動では、ムスリムのストライキの実際の指導には「アルメニア人採油労働者」が立った。<sup>⑥</sup>運動統制の「失敗」からして、この状況は労働者間の民族対立を却って煽ったのではないだろうか。

労働運動組織による後追いつ的な活動統制や要求立案は、既存の熟練工中心の「型」にはまったものだった。それは不熟練労働者の活動を効果的に支援するものにはなり得なかったのである。先に見たように、「連盟」は不熟練労働者の運動を統制する能力が無い事を予め自覚していた。労働運動は亀裂を見せ、それを埋めるものとしてムスリムの宗教的権威が労使関係の舞台に登場したのである。

### 三 運動とテロルの激化

これ以降、特に七月から、不熟練労働者の運動は激化していく。またその活動も暴力性を強める。

石油業主は自警団を強化している。六月一九日に前述の請願が出されている。「油田・工場での操業は事実上不可能」との訴えはこの文書の性格上かなり誇張されたものであろう。しかし当時治安がかなり悪化していたことは、例えば六月二〇日の馬車御者のストライキの要求にも窺える。六月にバクーを訪れたメンシエヴィキ活動家スーホフの回想によれば、油田地帯では当局との直接衝突は皆無だったが、警察の不在のため強盗・殺人が頻繁にあり、夜間外出は危険だったとい<sup>②</sup>う。

石油産業ではないが、七月八日から一七日まで、ムスリムの多い海運業で大規模なストライキがある。これと並行して、一五日頃から「カスピ海黒海」社を中心に油田地帯でストライキが頻発する。この活動も、参加労働者は「タタール」が大部分である、と観察されている。<sup>④</sup>

労働運動には武装衝突が横行する。「カスピ海黒海」社のストライキで「最高の権威を持っていたタタールの指導者」ムスタファ・メシヤディが七月末頃に暗殺され、それが更にストを長期化させる。<sup>⑤</sup>一方、「ヴォタン」社経営者・「カスピ海」社のバラハニ主任・パイロフの反労働運動の指導者（ゴチユカ？）等が、ムスリム労働者によって殺害されている。<sup>⑥</sup>経営者・労働者双方が、武力を行使した威嚇や衝突を頻発させるのである。<sup>⑦</sup>

労働運動組織上層部の間には協議・協力関係もあったが、運動の現場では、組織間の対立も時に暴力的威嚇を伴った。<sup>⑧</sup>労働者間の民族対立の事例も散見される。<sup>⑨</sup>運動統制の低迷に乗じて、宗教的権威が煽動者として労働運動に介入していく。八月九日、ノーベル油田の油田労働者集会に「二人の回教僧が現れ」、「ストライキはアルメニア人の企てだ」と演説している。<sup>⑩</sup>現場の紛糾の原因をアルメニア人に押しつけようとしているのである。

バクー委員会も「連盟」もムスリム向けの活動を進めてはいる。特にバクー委員会は「連盟」の優位に対抗すべく精神的に活動を行った。しかし、六月に反ブルイギン国会・全人民武装蜂起をスローガンにするなど、その活動は飽くまで政治的なものであり、「労働運動」としては未熟であった。それでもバクー委員会は、自らが勢力を伸ばしつつあるとの心

証を持てた。これを背景に、バクー委員会は八月ゼネストを単独で挙行する。

#### 四 八月ゼネストの失敗

政治的ゼネストの計画は、七月からバクー委員会・「連盟」・「ダシナク」・「フンチャク」共同で進められていた。しかし七月二〇日の大量逮捕で「連盟」は弱体化し、ゼネスト反対に転ずる。これに「ダシナク」・「フンチャク」も追随し、バクー委員会は孤立する。

同時期のゼネストの挙行は「許し得ぬ有害な力の浪費」であり、ムスリム大衆への宣伝が不足し、武装した「タタール」の障害がある状況では、アルメニア人ポグロムを誘発する危険がある、というのが反対側の意見だった。これは極めて正確な予測だった。

しかし、バクー委員会は単独でゼネストを準備する。開始期日は一六日であった。そのスローガンは、「全ロシア的な労働者と農民の闘争」にバクーも連なり、「全ての対立と不和を追い払おう！」というものであった。⑩ 彼らはゼネストを労働者団結の手段と見ていた訳である。このゼネストを機に運動の覇権を奪う目算もあったと思われる。

しかし、ストライキは完全な失敗に終わる。警察・軍隊は通報により、前日から巡回を強化し逮捕を行っている。⑪ 当日の活動はバラハニから始まり、午前六時に電話線が切断され、七時頃から五―六人の武装した煽動者グループがストライキを強制して回る、というものだった。八時頃から午後一時まで中小石油企業で散発的に操業停止があるが、大企業にはその動きはない。警察の大規模な介入もなく、バラハニで一三名、ビビエibatで六名の煽動者が逮捕されて、運動は鎮静化する。⑫

この失敗の主原因は、他組織の非協力的な態度である。事前に「熱狂的な反ストライキ・キャンペーン」があり、当日も「連盟」系の労働者は一時的にストに同調した場合もあったが、「ダシナク」は積極的な反対行動をとっている。⑬ シュ

シャの「アルメニア人虐殺」報道が直前にあり、ムスリムの動向にアルメニア人は警戒を強めていた。アルメニア人組織は、本来民族色のあるはずのない八月ゼネストの企画を、ムスリムの活動として捉えていたのである。

バター委員会も、九月に出された報告で、ストライキの「教訓」として、ムスリム労働者への信頼を深めた事、「ダシナク」の組織は「労働運動の障害であることが暴露された」事を述べている。このゼネストも、積極的な参加者はムスリムだった。ムスリム対アルメニア人の対立構図が、労働運動の上で組織間対立に重ね合わせられたのである。

五月以来、労働運動を主導していたムスリムは、その展開に不満を高めていた。例えば八月一日の「カスピ海黒海」社ストライキでの妥協に対し、「ロシア人・アルメニア人・グルジア人熟練労働者が十分なストライキを邪魔している」との不満をムスリム労働者が洩らしている。<sup>⑤</sup>このいわゆる「最も戦闘的な労働運動の担い手」の不満は、既存の労働運動組織によっては解消され得なかった。一方、「ダシナク」は二月以降、本格的に武装自警団を組織し、その「脅威」はますます可視化されていた。モッラー等宗教的権威の宣伝、そして直前のゼネストにおける「ダシナク」との対立によって、ムスリム労働者は特にアルメニア人をスケープゴートとして選んだのである。

① Muzman (1966), c. 247-250.

② Villari (1906), pp. 128-131; "Писма И. И. Воронцова-Дашкова

Николаю Романову (1905-1915гг.)", (Издатель: В. Семенович) КВ 26, 1928, c. 97-126 を参照。後に彼の政策はストレイビンの批判を受ける。高橋清治「ロシア帝国とカフカス総督府」『ロシア史研究』五九号、一九九六、二六一-五三頁を参照。

③ Swietochowski (1985), pp. 42-43.

④ "Mogzani", No. 6.

⑤ Muzman (1966), c. 250.

⑥ 「タター語」による宣伝活動の必要性が、第三回第六会席上で力

説を述べた。PZG, No. 126.

⑦ 鉄道労働者のゼネストはあるが、これはザカフカス全土の鉄道ストと関連するものであり、バターの石油労働者との関係は薄い。また、労働運動とは直接関連しないが、二月三日から三月四日まで、バターはアーシューラーの市内興行で賑わう。アーシューラーとはシーア派第三代イマームの殉教記念祭礼で、異教徒やスンニ派近代主義者の眼には「野蠻」な自傷儀式も行われる。この儀式が初めて、しかも衝突後間もない時期に、バターで開催された事は、他民族とムスリムとの溝を深める事にもなったのではないだろうか。Henry (1906), pp. 164-170; Hajibeyli, Jeyhoun Bey, "The Origins of the National

Press in Azerbaijan." *Asiatic Review*, oct. 1930, No. 88, vol. XXVI, pp. 759-760.

- ② *ИП* (Рохлин), с. 100-101.
- ③ Там же, с. 103-104. *РДБ*, No. 133. 警察報告は群衆を解散せしむる報告として、虚構として誇張してある。
- ④ *РДБ*, No. 129, 132. *タタール* 暴徒の例として *ИП*(Рохлин), с. 104 を参照。
- ⑤ Львов (1926), с. 140.
- ⑥ *ИП* (Рохлин), с. 96-97; с. 105.
- ⑦ Там же, с. 106; *РДБ*, No. 131.
- ⑧ *ノール* 及び *トルキ* *РДБ*, No. 132, 136, 137, 139, 140, 152. *トルキ* 及び *トルキ* *РДБ*, No. 134, 135, 138, 141, 143; *ИП* (Рохлин), с. 106-110 を参照。
- ⑨ *РДБ*, No. 147; *ИП* (Рохлин), с. 107-110.
- ⑩ *РДБ*, No. 145.
- ⑪ *ИП* (Рохлин), с. 108-110; Раевский (1930), с. 153-156.
- ⑫ *РДБ*, No. 156.
- ⑬ *РДБ*, No. 157.
- ⑭ *ИП* (Рохлин), с. 110.
- ⑮ *ИП* (Рохлин), с. 100.
- ⑯ *РДБ*, No. 152. 石油採掘生金議院議決案十箇を挙。
- ⑰ *ИП*(Рохлин), с. 107-110. (一九〇五年五月十二日)。*タタール* 先例 参考。 *РДБ*, No. 102. (一九〇五年四月十二日)。
- ⑱ *トルキ* *РДБ*, No. 139.
- ⑳ *РДБ*, No. 152.
- ㉑ *ИП* (Рохлин), с. 106.

⑳ 第一章 警察

- ① *РДБ*, No. 169. 乗車拒否権 危険な場所への乗入れ拒否権等を要求。
- ② Сухов (1925), с. 117.
- ③ 船員 *トルキ* *РДБ*, No. 171, 173, 176, 177, 181. 一八九七年の数字によつて 船舶建造関係者六百四〇名、水運関係者三五九名に及ぶ。三三三回客を運ぶ。 Altsstadt (1983), pp. 61-62.
- ④ *РДБ*, No. 180.
- ⑤ *РДБ*, No. 188; Сухов (1925), с. 119, 124, 132-133.
- ⑥ Львов (1926), с. 141; *ИП* (Эфендиев), с. 49-50; *РДБ*, No. 189.
- ⑦ Сухов (1925), с. 115-119.
- ⑧ 六月の *トルキ* 派兵をた *トルキ* の回想を参照。
- ⑨ 例として八月の煙草工場 (アルメン人企業) の *トルキ* アルメン人の優先雇用は他民族が抗議してゐる。 *РДБ*, No. 165. 雇用時に民族の成員を *トルキ* 珍しむるがため。 ロシア人「*トルキ*」は *トルキ* 優先雇用の例として *ДББ*, No. 74 を参照。
- ⑩ Сухов (1925), с. 129-130; 時期を異なるが 類例 *ИП* (Эфендиев), с. 40 を参照。
- ⑪ *РДБ*, No. 162, 163, 170.
- ⑫ Львов (1926), с. 143-144; *РДБ*, No. 183, 227.
- ⑬ *РДБ*, No. 193-*ДББ*, No. 70; *РДБ*, No. 196-*ДББ*, No. 71; Раевский (1930), с. 159.
- ⑭ *РДБ*, No. 194, 195.
- ⑮ *РДБ*, No. 197, 198, 199, 210.
- ⑯ Львов (1926), с. 145; *РДБ*, No. 227.
- ⑰ Там же. 禁煙は八月衝突以前。
- ⑱ Сухов (1925), с. 133; *РДБ*, No. 192.

まとめと展望

一九〇五年五月以降、ムスリムとアルメニア人との対立の構図は、熟練工と不熟練労働者の対立の構図に重ね合わされていった。それを補強する状況は労働運動自体にもあった。運動統制の不手際と党派対立が両民族の対立を深めた。八月一六日ゼネストに対する反対活動の先鋒は、まさにアルメニア人の可視的脅威たる「ダシナク」だった。

武力衝突の創始とアゼルバイジャン各地への伝播によって、ムスリムのアルメニア人への敵意は増幅された。しかし、農村部と異なり、「ゴチュ」層は油田の労働者とは対立する側面も持ち、その影響力は限られていた。言説の場でその敵意に肉付けをしたのは、主にモッラーなどの宗教的権威だった。

先に引用した「ストライキはアルメニア人の企てである」とのモッラーの言葉は、「ムスリム／不熟練労働者に恩恵をもたらさないストライキはアルメニア人／熟練労働者の企てである」と読み替える事が出来る。宗教的権威による、アルメニア人を敵対視する言説は、ムスリム労働者によって、労働運動上の不満を解決するテーゼとして読み替え／受け入れられたのである。アルメニア人は、南ロシアのユダヤ人と同様に、スケープゴートの役割を担わされることとなった。ムスリム労働者は、「反動の走狗」―民族衝突の参加者と「最も戦闘的な運動の担い手」―汎民族的な労働運動の参加者に分裂していた訳ではない。彼らにとっては、八月衝突は労働階層対立の現れだった。もしくは既存の労働運動への失望の表明だったとも言えるかもしれない。労働運動の「最も戦闘的な」担い手がまさに同時に「反動的」民族衝突の主体となったのである。

その意味では、党派対立が民族衝突に果した役割も小さくなかった。バター委員会の先鋭的なゼネスト挙行は、結果的に民族対立を煽ることとなった。峻厳な党派対立は民族対立と並行した。

バター委員会はこの後、ムスリム／不熟練労働者の間に勢力を伸ばしている。バター・ソヴェトは「連盟」の主導で形

成されるが、一九〇六年九月には、メンシエヴィキの「機械労働者組合」に對抗して、不熟練労働者中心の「石油労働者組合」が形成され、バクーの労働運動の主力となる。<sup>①</sup> 社会民主労働党の党派対立は、民族とも労働階層とも重ね合わされ、二つの対立を内包していた。

一九〇五年バクーの民族衝突それ自体は、ムスリムにとっては、「階級」と「ネイション」という二つの近代的帰属意識の形成に逆らうものだった。国民形成史上は、この衝突はかえってアゼルバイジャン・ネイションの成立を遅らせた。勿論、民族衝突の国民形成史上の意義を考えるためには、バクーのみの分析では不十分ではある。衝突の広がりをみると、バクー市を除くバクー県の農村部には、アルメニア人人口が僅かなため、報道に上る規模の衝突は起こっていない。

激しい武装衝突が展開されるのは、両民族の混住するエリザヴェトポリ県とエレヴァン県（現在のアゼルバイジャン西部とアルメニア）なのである。しかし、そこでシアア派の宗教的権威と「ゴチニ」その他のマフィア的・義賊的権威が衝突を主導した事、ムスリム近代主義者の参与がなかった事は確かである。<sup>②</sup>

宗教的・伝統的権威の影響を色濃く残し、バクーの石油産業に壊滅的打撃を与えた民族衝突は、ムスリム近代主義者にとって脅威となった。ムスリム近代主義者・企業主とアルメニア人共同の「平和委員会」は七月頃から活動を活発化している。<sup>③</sup> 近代主義者の啓蒙活動の活発化も、民族衝突への対抗としての意味合いが大きく、民族衝突は国民形成史上、かえって否定的な位置を占めたといつてよいだろう。

労働運動の地平においては、階層的／民族的対立は党派対立に吸収された。元々は政府煽動によって引き起こされた二民族の対立状況は、バクーの労働現場では、階層的対立と重ね合わされることで増幅された。更にそれらの対立は、基本的には、国際主義的であるはずの社民党の党派対立の中で具現化されるのである。

バクーでこの状況が続くのは、一九一一年にムスリム「民族主義」政党ミューサヴァトが誕生し、党派的な布置が変化するまでである。しかしそれ以降も、また他の地域でも、「国際主義的」政党の実際の支持層の偏りは、稀な現象ではな

ったはずである。

① Paevskii (1930), c. 151 ff.; Suny, "A Journeyman for the Revolution: Stalin and the Labor Movement in Baku, June 1907-May 1908", *Soviet Studies* vol. XXIII, No. 3 (Jan. 1972), pp. 373-394. 以後の労働運動については、木村英彦「ソ連の成立とその影響：アゼルバイジャンにおける民族自決」『講座世界史6 必死の代案』歴史学研究会編、東京大学出版会、一九九五、四五―七四頁；高田和夫「第一次大戦前夜のロシア労働運動——一九一四年、スター・ゼネスト論——」『歴史学研究会別冊特集』一九七四年二月、二二―九一

一三八頁；高橋清治「ザカフカス——一九一八年夏」『歴史学研究』第四〇九号、一九七四年、一一―三頁；同（一九七九）：Suny (1972) を参照。

② 同著者の「Гасанов, И. М., "Из истории крестьянского движения в Азербайджане в годы первой русской революции. " *Азербайджан в годы первой русской революции*, Баку, 1966, c. 160-200 を参照。県・郡の民族別人口比については Alstadt (1992), p. 30 を参照。

③ Alstadt (1992), pp. 42-43.

〔注記〕 本研究は平成八年度文部省科学研究費補助金（特別研究奨励費六七四六）の一部を使用した。

（京都大学文学部博士後期課程

## Suika School Intellectuals and the Production of Legitimacy

by

KOBAYASHI Junji

This paper examines the process in which the Shinto doctrine espoused by Yamazaki Ansai—Suika Shinto—gained acceptance and how members of this Shinto school acquired and redistributed cultural capital in early modern Japanese society. The Suika school's compilation of existing Shinto doctrines into a canon can be seen as a means through which early modern intellectuals acquired the cultural capital accumulated by medieval shrines. Disciples of the Suika school were able to redistribute this capital by legitimizing the ideology of “subject loyalty”. In the process, adherents of the Suika school used their knowledge and abilities to legitimate the governing class of nobles (*kuge*) and shrine attendants (*shake*). In short, Suika Shinto was promoted by those who sought to monopolize the ability to produce and bestow legitimacy.

## Labor Struggles and Ethnic Conflict in 1905 Baku

by

ITO Junji

Muslims and Armenians twice battled in 1905. Russian ethnic policies have been perceived as generating this conflict, and indeed the initial February clashes were initiated by officials and impoverished Muslim land-owners (*gochu*). By contrast, unskilled Muslim workers participated in the August disturbance. These workers continued their strike after May Day, thereby heightening tensions between them and the skilled Christian workers who had been generally satisfied with the December concessions. Thus an ethnic division paralleled a labor dispute which was exacerbated by the split between Bolsheviks and Mensheviks.

The August clash erupted in the wake of a general strike which failed as a result of the opposition of skilled Armenian labor organizations. Mullahs preached inflammatory sermons which directed the resentments of Muslim workers toward Armenians. In short, for Muslim workers, the August clash embodied a labor struggle between skilled and unskilled workers.

## Industrial Democracy, Scientific Management, and Workers' Control

—The Amalgamated Clothing Workers as a Case Study—

by

TAKEDA Yu

The Amalgamated Clothing Workers of America, from the 1910s to the 1920s, successfully introduced a system of collective bargaining and arbitration, and established industrial democracy in the chaotic men's clothing industry. But the union was held responsible for its contractual obligations, and the same rules and procedures restraining arbitrary acts of employers, ironically, bound the workers themselves. Industrial democracy thus protected the basic rights of the workers, yet at the same time suppressed their spontaneous and independent shop-floor activities.

In order to secure jobs for its members and maintain union standards in this highly competitive industry in which small and unstable shops predominated, the ACW had to cooperate with the managers of unionized firms in raising productivity and efficiency so that they could compete successfully with low-wage open shops. The union thus embraced scientific management. But this "cooperation" with management, far from being class collaboration, meant a deep invasion into the managerial sphere. The ACW could assume practical control of production and attempted to manage the men's clothing firms as well as the industry itself as a co-partner. Yet it must be reminded also that as long as the ACW regarded productive efficiency as a precondition of wage increases and better working conditions, the ACW's invasion into the managerial sphere was acceptable to management.